2019年度ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修報告書

193042　C.S.

1）活動概要

今回9月17日から25日にかけてヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修に参加した。初日と2日目には、カ・フォスカリ大学のキャンパスツアーと日本語の授業に参加させてもらった。日本語の授業では、高知の有名な食べ物や観光名所、よさこいなどについてのプレゼンの発表や、カ・フォスカリ大学の生徒と日本語で会話をして交流した。初日の夜には現地の日本語の先生方にピザ会を開いてもらい、カ・フォスカリの学生と交流しながらレストランでピザを食べた。3日目は、午前中にはカ・フォスカリ大学の本部へ行き、日本との関わりや大学の建物の特徴などの大学の歴史を学び、午後からは日本語を習っている現地の学生に、サン・マルコ広場やリアルト橋、Liberia Acqua Altaという有名な本屋、ため息の橋などのヴェネツィアの観光名所へ連れていってもらった。4日目は電車に乗ってヴェローナへ行き、ブラ広場、ローマのコロッセのような建物のアレーナ・ディ・ヴェローナ、ピエトラ橋、美術館、ジュリエットの家などの歴史的な建物を見て回った。5日目には水上バスを利用して、ガラス作りが有名なムラーノ島と、レース工芸が盛んなブラーノ島へ行き、ヴェネツィアンガラス工房や、レース工芸の美術館などを見学した。最終日は自由行動で、ヴェネツィアで最も有名なサン・マルコ寺院やお店を見て回り、午後からはカ・フォスカリの学生と合流してヴェネツィア市内を案内してもらった。

2）研修での学び・気づき

ヴェネツィアを訪れてみて気づいたことは大きく分けて３つある。1つ目は水と上手く付き合いながら生活しているという点である。課題図書の「海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　上」にも書いてあるように、今から１５００年前、ヴェネト地方に住む人たちは敵から逃れるために潟へ移り住み、地盤の弱い潟にたくさんの杭を打ち込み建物を建てていき、今のヴェネツィアを作っていった。その際に数少ない資源の中で、木材がヴェネツィアを支えていた。実際に町を見てみると、建物の地盤となった杭だけでなく、船をつなぎとめる杭や、沖のほうへ出ると船の進路の目印や標識として木の杭が使われているのが見られる。他にも、移動手段として使われていた船も木材で作られ、ヴェネツィアは高い造船技術を獲得していった。移動手段以外にも船の上で野菜や果物を売るなど、ヴェネツィアの人にとって船は生活に欠かせないものである。現在では、水上バスで一度にたくさんの人を乗せての移動や、ゴンドラでのヴェネツィア観光など、船は観光資源としてヴェネツィアを支えている。また、レース工芸で有名なブラーノ島では、漁師が自分の家へ帰る際に霧の中でもどれが自分の家か分かりやすくするためにそれぞれの色を塗り、カラフルになったと言われている。今では、それが美しいとたくさんの観光客が訪れるようになった。このようにして、ヴェネツィアでは水と上手に付き合いながら、たくさんの観光資源を生み出していったのだ。

２つ目は、日本との食文化などの日々の生活の違いについてである。まずピザについてだ。大きさは日本のものより大きいが、値段は日本のものよりも安く、1000 円前後が相場であった。焼き方も一つ一つ手作りで生地から作り、窯で焼くので時間も手間もかかるが、その分美味しいピザができる。イタリアの中でも、地域によってピザの作り方に違いがあり、ナポリ風とローマ風に分けられる。ナポリ風は生地が厚く、ふわふわした食感なのに対し、ローマ風は生地が薄く、パリパリとした食感が特徴である。ナポリの人たちは食に対する意識やプライドも高いため、ナポリピッツァしか認めないのだと現地の学生が言っていた。種類も豊富にあり、「ピッツェリア」というピザ専門のレストランがたくさんあり、普通のレストランでもメニュー表には２～３ページに渡りピザの種類がかかれていた。日本のピザとの違いがたくさんあり驚いたが、その中でも１番驚いたことは、ピザは１人１枚食べるということである。小柄な現地の学生があっという間に１枚完食していた。また食べ方も様々で、ナイフとフォークを使ってピザを切り分けて食べる人もいれば、手でちぎって食べる人もいた。周りの端の部分だけ最後にまとめて食べる人もいれば端だけ残す人もいるそうだ。ピザ以外にもパスタやリゾットが有名であり、リゾットは大きなお皿に盛られているため一見少なそうに見えたが、食べきれずに残してしまうことがあった。これらのことから、日本との食文化の違いとして、日本食はたくさんの食べ物を少しずつという感じなのに対して、イタリアの食文化はい１つのものを多量に食べるという違いがある。

そして、イタリアの人たちは想像していた以上に日本語を知っていた。カ・フォスカリ大学では、まだ日本語を習い始めたばかりの１年生でも、日本語で時刻を正確に伝え、１万などの大きい単位をきちんと発音できていた。街中を歩いていても、デパートでは日本語や中国語を話せる店員がいたり、チョコレート屋の店員が、流ちょうな日本語で商品の説明をしてくれたりした。日本語をあまり知らない人も、「コンニチハ！」と自分が知っている精一杯の日本語を言ってくれた。日本人観光客が多いためかもしれないが、海外で馴染みのある言語を聞くと安心感がある。そのため、英語だけでなくたくさんのひとに寄り添った姿勢は日本でも取り入れいくべきだと思った。2020 年の東京オリンピックに向けて、少しでも多くの言語を知る必要があると思った。

またスーパーなどのお店でも、日本との違いがいくつか見られた。ホテル近くのスーパーは、「テアトロ・イタリア」というかつて劇場だった場所を改装してスーパーマーケットにした所で、イタリアで１番美しいスーパーマーケットと言われている。このように、古い建物を改装しつつ残していく文化がイタリアのみならずヨーロッパでは多く見られる。日本では、新しい建物の方が値段が高かったりするが、ヨーロッパでは幽霊が出そうなほど古い家の方が高い値段で買い取られることもある。また、イタリアにはコンビニがない。宗教上、日曜日が休みの店が多いため、24 時間お店を開けることは難しいからだ。ムラーノ島、ブラーノ島などの観光地でも日曜日は出歩く人が少なく、開いている店も少なかった。そして、レストランなどのトイレは無料だが、公衆トイレはほとんどが有料で、入口の受付けの人にお金を払って利用する。水道代や紙代のためだけでなく、密室での犯罪を防ぐことにもつな

がっているそうだ。
他の日本との違いとしては、電車のチケットの買い方が挙げられる。窓口以外にも自動販売機での発券はにほんと似ているが、チケットを買った後に、イタリアでは改札機を通らずに検札機にチケットを入れる。検札機は通らなくても列車には乗れてしまうので、言われなければ気づかなかったと思う。しかし、検札機を通さなければ、罰金を取られてしまうこともあるのだそうだ。
他にも、ヴェネツィアでは犬にリードをつけずに散歩している人が多くみられたことに驚いた。日本では考えられないが、海外では「ノーリードの犬こそきちんとしつけられているので安全だ」という考えもあるようだ。ヴェネツィアでは車や自転車は通らないので交通事故などの心配はないし、飼い主が呼べば戻っていくので特に問題はなさそうに見えるが、アレルギーのある人たちが近くにいたらどう対処するのだろうかと疑問に思った。日常の生活の中にも認識の違いは多くあるのだなと思った。
３つ目は、狭い土地に工夫して暮らしているという点である。ヴェネツィアの街を歩いてみると建物が密集しており、細い路地や水路、橋がたくさんあり、似たような道が多いため、歩いているうちに迷子になってしまうことが多々あった。現地の学生でさえも、大学に通い始めた最初の頃はスマートフォンが手放せず、人に道を聞きながら大学へ通っていたそうだ。だが、サン・マルコ寺院などの有名な建物へは、壁に貼られている黄色い看板を見ればたどり着くことができる。少し歩けば看板があるので有名な観光名所へならば、ほぼ迷うことなくたどり着くことができた。そして、ヴェネツィアの人はよく歩く。階段がたくさんあり、細い路地が多く、人がすれ違うのがやっとの道もあるため、車はもちろん、自転車もヴェネ内では走行禁止である。そのためヴェネツィアでは、たくさん歩かなくてはいけないため、現地のひとで太っている人はいなかった。段差も多いため、骨折した際には苦労するそうだ。実際に、ゴミを収集する人は大きなカートを押して、家の前にあるごみを回収していたり、荷物を配達する人もカートにたくさんの荷物を積んで、階段を慎重に昇り降りしたりしているのを目にすることがあった。私も研修中は毎日１０㎞以上歩いていた。健康に良い街なのかもしれないが、暮らすには不便そうだと感じた。実際に行って過ごしてみなければ気づかないことだったので良い経験になった。以上のことから、ヴェネツィアでは様々な知恵と工夫をしながら、何もない潟を開拓し、現在の素晴らしい景色が広がる街並みを作っていったのだということが実際に行ってみて実感することができた。

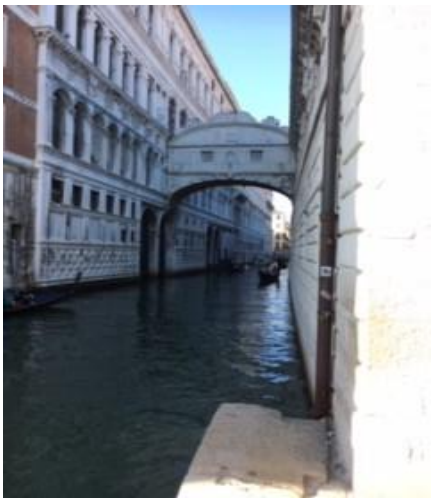
3）その他
今回の短期研修で、食や建物、生活などの様々な文化の違いを実際に自分の目で確かめることができ、益々異文化に興味を持つことができた。しかし、それらが満足にできたのは、日本語を習っているカ・フォスカリ大学の生徒たちのおかげであった。彼らがいなければ、安心して街中を歩くことも、レストランで自分が欲しいものを注文することもできなかっただろう。異文化交流にはやはり言語が不可欠だということを痛感した。今後は、英語の学

習に力を入れようと改めて感じた。また、来年にカ・フォスカリ大学の生徒が来た際には、何か役に立てるように、国際交流のイベントなどに積極的に参加するようにしたい。

4）研修先での写真

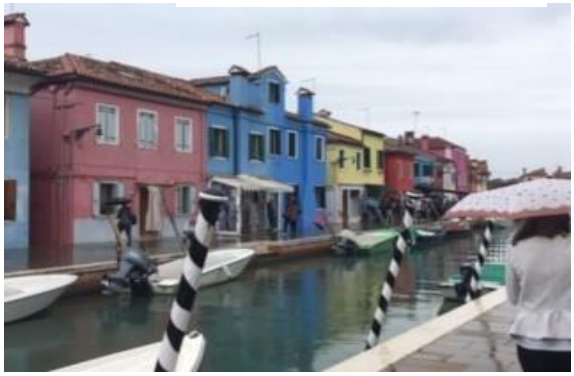
ピザ会でのピザ

ため息の橋



船の上の野菜・果物屋

ブラーノ島の街並み



鉄道までの道を示した看板

サン・マルコ寺院

2019年度ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学短期研修報告書

183012 K.I.

1) 活動概要

今回9月17日から25日までイタリアに一週間滞在し、とても実りのある研修になったと実感することができた。初めての海外訪問、初めての経験ばかりで、当初は不安や緊張もあったが、毎日が新しい発見の連続で貴重な思い出となった。

この研修では一週間を通してヴェネツィアに滞在した。最初の3日間はカ・フォスカリ大学を訪問し、日本語を学ぶ学生の授業に参加し、大学のキャンパス内を案内してもらった。キャンパス案内では、カ・フォスカリ大学がどのように始まり現在に至ったのかという過程や日本語学部が設立されるまでの背景を学ぶことができた。日本語の授業では、学生とグループになって共通点を見つけるというテーマで自由に日本語で会話をした。また、授業内で高知についてのプレゼンを行い、よさこいや鰹のタタキなど高知の文化を紹介した。キャンパスの案内では、18日の晩には、カ・フォスカリ大学の学生が歓迎会を開いてくれ、一緒にピザを堪能した。

4日目は、カ・フォスカリ大学の学生2人にイタリア北部の都市、ヴェローナを案内してもらった。ヴェネツィアから電車でおよそ1時間の場所で、古いお城の建物を利用したカステル・ヴェッキオ博物館やシェイクスピアの作品で知られるジュリエットの家など、歴史的建造物や遺跡を見ることができた。また、ローマのコロッセオに似たアリーナ・ディ・ヴェローナという円形の劇場を近くで見ることができ、とても中世に建てられたとは思えない迫力のある建築物だった。ヴェローナは、ヴェネツィアと同様に街全体が世界遺産に指定されているという。古くからの歴史が感じられ、貴重な芸術作品を間近で拝見できた思い出深い体験となった。

5日目も学生に案内してもらい、ヴェネツィアにあるムラーノ島とブラーノ島を訪問した。ムラーノ島はガラス工芸が盛んな地域で、ガラス工房を見学し、工房の中で販売されている作品を見て回った。他にも、広場に置かれたガラスでできたカラフルなクリスマスツリーを見たり、島の教会でキリスト教に関する壁画や絵画、祭壇などを見学することができた。次に行ったブラーノ島はレースで有名な島で、以前はレースの学校もあり、女性たちがそこでレースの編み方を勉強したという。私たちは島のレース博物館に行き、女性たちがレース作品を作っていく様子や貴重なレース作品の数々を見ることができた。作品はどれも精巧に編み込まれていて、女性たちの高度な技術やレース模様の芸術性が感じられ、職人さんたちがプライドを持って作品を作り上げたのだということが分かった。

最終日はヴェネツィアで過ごし、仲良くなった現地の学生と一緒に街を散策したり、ディナーを楽しむことができた。

2）研修での学び・気づき

今回の研修を通して、多くのことを体験し、学ぶことができた。日本語の授業に参加した初日は、自分がイタリア語や英語があまり流暢でない分、学生たちとうまくコミュニケーション

をとることができるかという不安が大きかったが、いざ授業で学生たちと会話をしてみるとほとんど理解することができ、驚いた。伝わりづらいときには、身振り手振りや簡単な英語を使うことで会話をすることができた。不安を持っていても、話してみなければ会話が通じるかどうか分からないということを知って、勇気を持って話すことで新たな交流が生まれるきっかけにつながるかもしれないということが分かった。また、会話の授業に参加していた多くの学生が日本語が堪能であることに驚いた。大学に入学してから日本語を学び始めた学生も多くいる中で、２、３年ほどでスムーズに会話できていることが小学生の頃から英語を勉強しはじめたにも関わらずうまく話せない自分との外国語教育の差を感じ、見習わなければいけないと痛感した。

現地の学生と会話する中で、多くの学生が日本の小説やアニメ、ドラマなどを見ていることを知り、日本の文化が海外の人たちに受け入れられていることを肌で感じることができた。また、京都や東京などの有名な日本の観光地の他にもたくさんの地名を知っていて、海外の人たちが日本を好きで勉強してくれていることにとても嬉しく思った。大学では茶道サークルに入り日本文化を学んでいるが、今までよりも、ますます日本の文化を大切にしていきたいという気持ちを強く感じた。

カ・フォスカリ大学のキャンパスツアーでは、大学の建物が元々は王様の所有する建物だったということに驚いた。日本は木造建築の建物が多く、地震などの災害も多いため古い建物の保存が難しいが、ヨーロッパならではの石造りの建物であるがゆえに今でも使われているということが日本と違う特徴だと感じた。また、建物は修復しながら残しているということを聞き、古いものを大切にする文化が現れていて歴史を感じられる良い文化だと感じた。

イタリアに到着してずっとヴェネツィアにいたため、ヴェローナに着いたときは、水路がなく車が走っているということが日本にいるときであれば違和感はないが、このときは際立って感じられた。ヴェネツィアでの交通手段は徒歩か船に限られていて、私たちはずっと徒歩で移動していたので、車が走っていることやエンジン音が聞こえてくることに真新しさのようなものを感じた。ヴェネツィアの静かな街で数日過ごし、車のない生活に少し慣れつつあったため、車がないのは現代の人にとっては不便に感じることもあるかもしれないが、町並みを肌で感じられ、騒音などのストレスがない生活の良さを実感することができた。交通手段が限られるヴェネツィアには健康な人が多いと聞き、とても納得した。体だけでなく心身共に健康な人が多いのではないかと感じた。便利さを追求し技術が進歩している現代で不便なことに良さを感じることができ、便利さだけが幸せではないのだと思った。

ヴェローナではカステル・ヴェッキオ博物館を訪れた。まず荷物を持って入場することができないことに驚いた。おそらく防犯対策ではないかと推測するが、日本にいたときにはどこの美術館や博物館でも荷物は持ち込むことができたため、日本の治安の良さを垣間見ることができた。また、驚いたのが芸術作品の写真撮影が許可されていることだった。ムラーノ島で訪れた教会でも絵画や壁画を誰でも撮影できた。日本では大抵の美術館で写真が禁止されているのではないかと思うが、イタリアではあまり深刻に考えられていないのだろうかと感じた。博物館で一番印象に残っているのが、貼り付けにされたキリストの石像である。手足を釘で打ち付けられ、痛みに苦しむキリストの表情がリアルに表現されていてキリストの感情がとても伝わってくるように感じた。

アリーナ・ディ・ヴェローナは外からしか見られなかったが、その劇場の大きさにとても驚いた。収容人数がおよそ２万５千人と聞いてとても納得した。地震で倒壊してしまった箇所もあるが現在でも野外オペラが上演されているという。中世に建てられ、それが今なお続いているということに古いものを大切に扱うイタリアの人たちの国民性を知ることができた。

ムラーノ島では工房を見学し、職人さんが温められたガラスを窯から出し、膨らませ形作るところを見た。はじめは棒状の赤い物体だったものが職人さんの手によって美しいガラス作品に生まれ変わる様子を見て、技術と表現力を兼ね備えた芸術だと感じた。

ブラーノ島はとても可愛らしい島だった。漁師が船の上から自分の家を見つけられるように家を目立つ色に塗ったためだという。本当に人が住んでいるとは思えないような赤やピンクのカラフルな家々が建ち並んでいてまるでオモチャの国のようだった。レースの博物館では女性たちが作り上げた繊細な作品が数多く展示されていた。カーニバルでつける仮面もレースの装飾が施されていて、今まで見たこともないくらいミリ単位の繊細さで女性たちの技術の高さを見ることができた。今ではレース学校が閉校してしまったと聞き残念に思ったが、これらの美しいレース作品をこれからも保存し、後世に残していってもらいたいと感じた。

ヴェネツィアでの食事は日本と違う特徴がいくつかあった。日本のように何も言わなくても無料で水を出してもらえるのではなく注文しなければいけないことやお店で食べるときには席の料金がかかること、チップの文化があることだった。水は、他の地域でもお金がかかったが、交通手段が限られるヴェネツィアでは一度に多くの食品を運ぶことができないため水が貴重でお金がかかるのかなとも思った。しかし、料理を注文して待っていると店員さんがプレッツェルのようなビスケットを持ってきてくれたりパンが無料で食べられるサービスがあったりして気前のいいサービスだと感じた。チップの文化は事前に聞いていたため、お金を払うときは余分に用意していたが、意外にもチップを求められることは少なく、払わなければいけないという義務のような感じではなかった。

イタリアで食べるのを楽しみにしていたピザは、１人一枚食べるのが基本ということは知っていたが出されたときは一枚の大きさに驚いた。日本では２、３人でシェアするくらいの大きさだったが、現地の学生たちは女の子でも全部１人で食べ切っていた。私は完食できず何切れか残してしまったが、本場のピザを堪能できて良い思い出となった。またピザの食べ方は決まっておらず、ナイフとフォークで食べても手で食べても良いそうで、手で食べるのが基本と考えていたため少し驚いた。

ヴェネツィアの散策では、リヤカーを引く作業員の姿を多く目にした。日用品や食料などの他ゴミもリヤカーで運んでいて階段がある橋が多いため大変そうだと感じた。ゴミはリヤカーで運んだ後船に載せられヴェネツィアから出されると聞いた。ヴェネツィアは陸地が少なく世界遺産にも指定されているため、保管場所が必要で景観を守ることを考え外に出しているのではないかと考えた。またトイレでは男女共用になっていることや便座がないことに驚いた。便座がないため座らず腰を浮かせて用を足すそうだ。また旅先ではトイレを使うのにお金がかかることもあって、お金はいらないことが当然のように思っていたため、日本のトイレの便利さに改めて気づかされた。

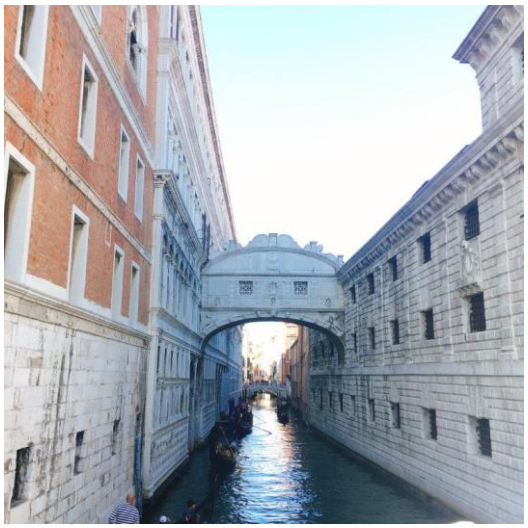
3）その他

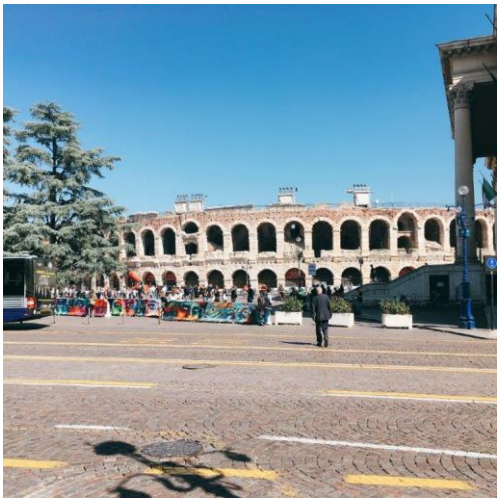
初めての海外は、はじめは不安が大きかったが、全てが初めての体験ばかりで思い出に残るとても貴重な時間となった。日本語の授業に参加し、現地の学生と会話する中で、改めて自分の英語力の低さやコミュニケーションを取ることの大切さを強く感じた。引率の先生が博物館で英語の紹介文を読んで解説していただいたときは、もっと英語を勉強し、自分で英語を聞き取り理解できるように努力していこうと思った。

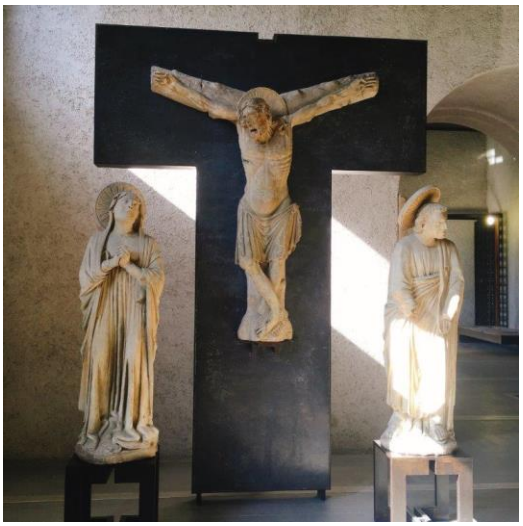
学生との交流では、日本の文化が好きで日本語を勉強し始めたという学生が非常に多かった。日本文化は後継者不足で無くなりつつあるものも多いため、日頃から日本の文化に親しみを持って過ごしていこうと感じた。

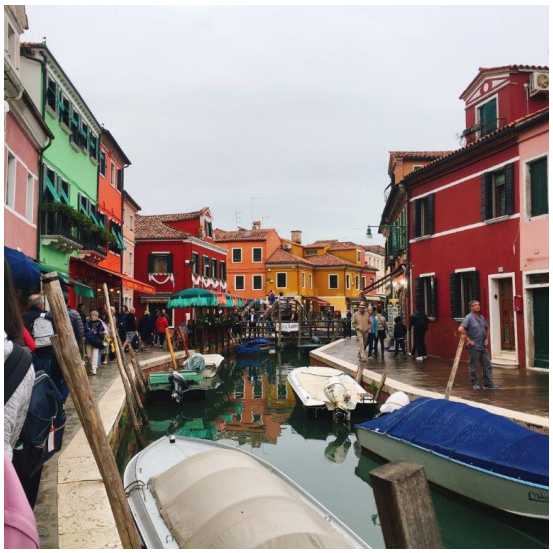
最後に、研修の手続きをして下さった林さんをはじめとする事務の方々、引率の向井先生、アパートでお世話になった鞠古先生、カ・フォスカリ大学の先生方・学生、また、一緒に研修に参加した学生等その他研修でお世話になった方々にお礼申し上げたい。

4）研修先の写真









2019 年度　ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修報告書

196012　R.K.

１）活動概要

私は 9/17 から約一週間のイタリア研修プログラムに参加した。今回のプログラムに参加したのは、海外へ行って異国の文化に触れ、日本文化との違いを知ることで自分の視野を広げたいという考えがあったからである。

今回の研修では訪問先であるヴェネツィアのカ・フォスカリ大学の他、イタリアの三つの都市を訪れた。最初の三日間はヴェネツィアで過ごし、カ・フォスカリ大学で日本語学科の授業に参加するなどし、その後はヴェローナや、ムラーノ島、ブラーノ島へ行き、歴史的な建造物や教会、美術館などを訪ねた。

２）研修での学び・気づき

短い研修期間ではあったが、カ・フォスカリ大学の学生をはじめ、訪問先の土地で出会った多くのイタリア人は私たちにとても親切で、友好的であった。特に日本語学科の学生には大変お世話になり、授業後には一緒に食事をとり、ヴェネツィアの町の案内までしてもらった。また、町中を案内してもらって気づいたことだが、ヴェネツィアは観光地として人気の土地であるためか、ショップの店員も語学が堪能で、私たちが日本人だとわかると流暢な日本語で接客を始めたことには驚かされた。今回ヴェネツィアの町を案内してくれた学生も、大学での専攻は日本語であるが、英語はもちろん、他にもフランス語やドイツ語、中国語や韓国語などを話すことができると聞いて、個人差があるとはいえ日本の外国語教育との差を感じさせられた。日本の大学では、英語を専攻しても一般教養などの授業も受けなければならないところが多いと思うが、カ・フォスカリ大学の日本語学科はそうではなく、朝から夕方までずっと語学に関する授業しかないそうだ。それに付け加え、カ・フォスカリ大学の学生は学習に対してとても貪欲で、「日本語をもっと上手に話したい」と私たちに積極的に話しかけてくるなど、授業外でも日本語を習得することに真剣で、学びへの姿勢の差も感じられた。

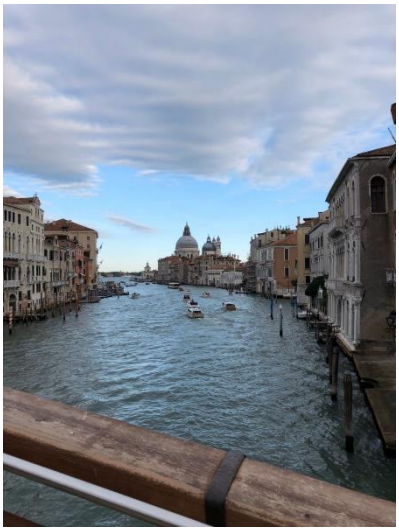
「水の都」と称され観光地として有名なヴェネツィアであるが、町には確かに観光客が多く、実際に歩いてみると観光にはとても良いが暮らすには大変な町だと感じた。その訳は、ヴェネツィアには運河が縦横に走っており、狭くて曲がりくねった道は迷路のようになっている上に、川を横断するための小さな橋や階段、段差が多いため、車や自転車での移動ができないからだ。バスやタクシー、パトカーや救急車などもすべて船で、ヴェネツィアで目的地に辿り着くためには自力で歩くことが必須である。滞在中も車椅子の人の姿は見えず、もし怪我をして松葉杖などで移動すると大変なのだそうだ。急病になり救急船を待つのも大変であるし、自力で歩くことが困難な人が暮らすのはほぼ不可能であるような土地なので、ヴェネツィアは自分の健康を維持するのにはとてもいい町だが、一度健康を損なうと住めない土地だと感じた。ヴェネツィアの町を歩く人の姿が皆健康そうなのは、ヴェネツィアの町がそうさせているのか、健康でなくなってしまった人が町を出ていっているからなのか、どちらなのだろうかと疑問に思った。私も最初は見慣れない町並みや景色に気を取られ町中を普通に歩くことができていたが、数日後にはすっかりくたびれ、宿泊先から大学までの移動でさえ億劫になってしまった。さらにヴェネツィアではレンガ造りの遥か昔に建てられた歴史的な建物を今でも利用して暮らしているので、アパートなどの建物でもエレベー

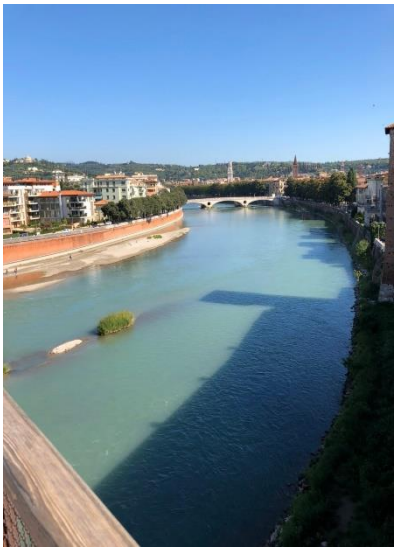
ターやエスカレーターなどはないことが多く、その上建物一つ一つが日本よりも高く造られているので、移動するためには多くの階段を自力で登らなければならなかった。日本では車やバスでの移動が当たり前であるし、日本人は一階から二階へ上がるだけでもエスカレーターやエレベーターを利用する人が多いので、ヴェネツィアの人よりもはるかに運動量が少ないのだということを今回身をもって実感した。
イタリアでの滞在中、様々な料理を口にしたが、その形態は日本とはまったく異なっていた。まず、食事をとるために店に入ると、多くの店では最初にパンが運ばれてくる。もしくは、San Carlo と書かれた袋に入った細長いパンが事前にテーブルにおいてあり、これはサービスの一つであるそうだ。メニュー表には、ANTIPASTO(前菜)、PRIMO PIATTO(第一のお皿)、SECONDO PIATTO(第二のお皿)、DOLCE(デザート)の欄があり、第一のお皿には主にパスタ料理が、第二のお皿には肉や魚料理が載っていた。ピザだけは別途でメニュー表を用意しているお店も多いようだった。実際に頼んでみると、一人では食べきれないほどに一つ一つの量がとても多く、パスタやピザの一皿だけでお腹が膨れてしまうので、前菜やデザートを注文する余裕はないと感じたが、それでも一緒にいたイタリア人の学生たちの多くは普通に完食していたので、ヴェネツィアを歩く現地の人に細身の人が多いのは毎日長い距離を徒歩で移動しているからだと思った。イタリアには日本のような主食という概念はなく、家庭料理のことになると私にはわからないが、店で売られている食事の多くは小麦から作られたパスタやピザ、パンが多いようだった。特にピザはファストフードとして安く町中で売られているのをよく見かけることができた。お米も食べられているようではあったが、リゾットとしてであったり、ライスコロッケにしていたりと、いずれも日本の一般的な食べ方とは異なっているようだ。また、食文化の違いはスーパーにも顕著に表れており、様々なパスタやパンがコーナーの多くを占めている他に、飲料水のコーナーが大きかったことも印象的であった。イタリアの水道水は硬水で飲むことはできるが、町中に自動販売機やコンビニエンスストアがないため出先で飲み物が必要になったときはスーパーで買うことが必要になってくるため、スーパーの飲料水のコーナーが大きいようだ。さらに、スーパーの飲料水のコーナーは大きい理由として、イタリアでは炭酸水をよく飲むということがあるのではないかと考えられる。イタリアの学生に聞いた話では、イタリアでは普通の水と同様に炭酸水もよく飲まれるそうだ。そのため、スーパーには、強炭酸、微炭酸、ナチュラル（ガス抜き）と表示された水が並べられているので、飲み水を購入する際は注意深く選ばなければならなかった。食事だけでなく、飲み水にまで日本と違いがあることに驚いた。
イタリアと日本では、気候も建物も国民性も、食事様式も大きく異なっていることが分かった。訪問したのは九月下旬であったが、朝と晩は冬の始まりのように冷え込み、昼間には乾燥して真夏のように暑い時もあった。イタリアでは昔ながらの古い建物を大切にし、住居などとして今も利用していて、地震が多い日本では見ることのかなわないような古い時代の建物も多く残されているため、歴史を身近に感じることのできる町だ。食事の際にはお酒を交わしながら楽しむ姿を町中でよく見ることができた。

３）その他
ヴェネツィアと日本の食文化を比べ、イタリア人は地元の料理に誇りを持っており、日本の方が異国の料理に対しては馴染みがあるように思えた。イタリア料理の方が日本よりも量が多く摂取カロリーが多そうであったが、ヴェネツィアで見る人々は細身であったので、やはり食事と運動のバランスが大事なのだと思った。ただ、観光地や立地ゆえの物価のせいもあってか、やはり肉や魚、野菜の値段がパンやピザに比べて高いため、比較的経済的余裕のない若年層の食生活は偏りそうだと思った。同様に日本人も意識し

て食生活を整えなければならないが、日本人についての一番の問題は食の偏りよりも運動不足であると今回の研修で感じた。

４）研修先での写真





Havana Club

2019年度ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修報告書

193060　Y.N.

1）活動概要

9月17日から9月25日の9日間、イタリアにあるヴェネツィア　カ・フォスカリ大学での短期研修に参加した。18日と19日の2日間は多くの日本語の授業に参加させていただいた。主に、自由会話とひらがな指導の授業に参加した。自由会話の授業では多くのイタリア人の学生といろいろな話をすることができた。また、授業の冒頭では高知についてのプレゼンを行った。20日の午前はヴェネツィア　カ・フォスカリ大学の本部ツアーを行っていただいた。この大学の建物のことについて、また、日本とのかかわりについてなどとても詳細に話を聞くことができた。21日はヴェローナ、22日はガラスで有名なムラーノ島、レースやカラフルな街並みで有名なブラーノ島を訪れた。両日ともカ・フォスカリ大学の学生に案内していただいた。そのため、いろいろな観光名所をスムーズにまわることができた。また、宗教に関することなど、日本人だけの旅行ではわからない、様々なことを教えていただきながら回ることができた。23日は自分たちだけでヴェネツィアを観光した。日本語の授業に参加したときにイタリア人の学生から聞いたおすすめの場所やお店などを中心に回った。そのほかの自由時間などは授業で仲良くなった学生にヴェネツィアを案内してもらったり、一緒に食事をしたりした。

私は今まで行ったことのないイタリアという国の文化に触れること、イタリアに数多く残っている歴史的な建物や作品を自分の目で見たいと思い、この短期研修に参加した。実際に行ってみてこれらのことはもちろん、多くのイタリア人の学生と交流することができ、本当によかったと思う。

2）研修での学び・気づき

研修の期間中、アパートの一室をお借りしてヴェネツィアに滞在していたため、ヴェネツィアの人たちの生活にも触れることができた。最も私たちの生活と異なっていることは、たくさん歩くということだ。「水の都」と呼ばれているように、ヴェネツィアにはたくさんの水路があり、多くの船やボートが行き来している。しかし、ヴェネツィアでの移動手段は水上では水上バスや水上タクシーなどのボート、ゴンドラなどがあるが、陸では徒歩しかない。車が入ることができないのはもちろん、水路や川に架かっている橋が階段状になっているため、自転車での移動もできない。これはヴェネツィアでは昔の建物や橋をそのまま今でも利用しているからだ。少し不便に思うかもしれないが、これこそがヴェネツィアの町全体が歴史的な価値を持つ理由だそうだ。また、道が直線状で結ばれていないため、かなり大回りをしないとたどり着けないということも多くあり、1日に2時間ほど歩くのは当たり前だった。日本ではほとんどの家庭が車を持ち、また、1人1台自転車を持っている。そのため、たとえ近くのお店に行くとしても徒歩で行くということはほと

んどないだろう。そう考えると日本での普段の生活とはとても異なっていると思った。

また、先ほど少し述べた通り、ヴェネツィアでは昔からの建物がそのまま使われている。例えば、カ・フォスカリ大学の本部の建物はもともと、ヴェネツィアの元首であったフランチェスコ・フォスカリの邸宅を改装して使われていたり、日本語学科のキャンパスはもともと工場だった建物をそのまま利用していたりしていた。そのため、外観を見ただけではどれが大学なのかわからなかった。それほど大学がヴェネツィアの街並みに溶け込んでいた。日本では大学以外でも、何か違う目的でその土地を利用しようとするとき、もともとあるものを壊して新しい建物が建てられている。そのため、本来の日本の伝統的な街並みの様子が現在でもうかがえるのはわずかな、限られたところしかない。日本の文化的なものや、歴史的なものを残していくためには、もともとあるものを最大限活用し、多少の不便があっても、昔のままの姿をなるべくとどめておこうとすることが重要なのではないかと感じた。

日常の生活では日本との違いがとてもたくさん見られた。イタリアではどのお店に入っても「ボンジョルノ」と店員が言うと客もまた、笑顔で挨拶していた。先に客からすることもしばしば見受けられた。店を出ていく際にもありがとうという意味の「グラッチェ」と言っていた。このように客も挨拶をするのはイタリアでは当たり前だそうだ。日本では店員は「いらっしゃいませ」というが、それに対する返しはなく、客が店に入る際に挨拶するということはほとんどない。そのため、イタリアはお互い挨拶をすることで店員と客の距離が日本よりも近くに感じた。

食事をするときも日本との違いを感じた。日本人はピザを食べるときみんなでシェアして食べるが、イタリアでは１人で１つのピザを食べるということやレストランやカフェで水が日本のように無料で出されるということはないということ、注文後の食事が運ばれてくる間に、パンを食べるという習慣があるということなどがある。日本の食事に慣れている私にとって同じ味のピザを食べつづけるのは少し大変だった。日本食はご飯、汁物、主菜、副菜というようにいろいろなものを少しずつ食べるのでこのように感じたのだと思う。料理が来る前に出されるパンはとても固く、パサパサしていて、おいしいものというより、料理が出てくるまでのつなぎのものという感じだった。さらに、パスタやピザといった炭水化物の料理を頼んだとしても提供され、多くの人が食べていたので、イタリア人は日本人よりも健康に対する意識が低いのかなと感じた。料理自体はどれも本当にすごくおいしく、日本で食べるイタリアンよりもずっとおいしかった。しかし、もし、日本にあるイタリア料理店でも同じようにこのような食事の習慣が提供されれば、日本人はおそらく戸惑うだろうとも感じた。

ほかに少し戸惑ったこととして公衆トイレを利用するにはお金を払わないといけないということがあった。空港やレストラン、ショッピングセンターなどではそのようなことはないが、それでも日本人にとっては戸惑うように思う。しかし、トイレを清掃する人の立場になって考えてみるとお金を利用する人に払ってもらうのは当然のように思えた。

このように水が無料で提供されたり、トイレが無料で使えたりするなど普段当たり前だと思っていることがそうではない状況になった時、どれほどそれらがありがたいことなのか気づくことができた。

一方で気軽に誰とでも挨拶をしたり、便利さだけを求めるのではなく、昔からのものを大切にして日常を送っていたりするなど私たちが見習うべきことがたくさんあったとも思う。

ヴェローナを訪れたときに 2000 年ほど前に建てられた円形球戯場や中世の頃の城、ロミオとジュリエットに出てくるジュリエットの家など、これ以外にも 1 日でたくさんの歴史的に有名な建物を見た。ヨーロッパの建物が石やレンガで作られているのは当然知っていたが、初めて目の前で石やレンガでできたとても大きな建物を見てとても感動したことを覚えている。それらを見たときに日本の文化とイタリアの文化は全く違うものだと感じさせられた。特に、アレーナ・ディ・ヴェローナという円形球戯場が約 2000 年前に建てられたと知り、日本の 2000 年前の状況を考えてみると当時の日本では絶対に作ることのなかったものだろうなと感じた。

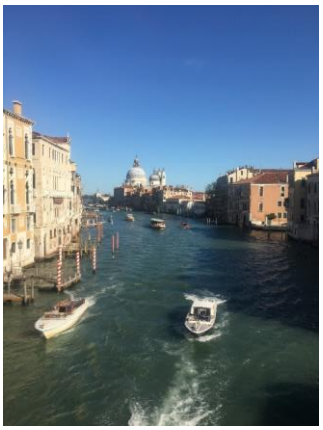
最後に、この研修で 1 番驚いたのはイタリア人学生の日本語能力の高さだ。大学に入学してから日本語を学び始めたという学生がほとんどだったが、3 年経つとほとんど完璧に日本語を話していた。私は彼らと授業の開始から終了まで途切れることなく、様々なジャンルの話を話すことができた。また、漢字も使いこなせていたことに驚いた。彼らがこんなにも短期間で日本語を習得できたのは日本語を実際に使う授業があるということと関係しているのではないかと思う。その授業というのは日本語自由会話というものだ。この授業ではその名の通り、グループに分かれて、お互いテーマに合わせて自由に会話するというものだ。日本では外国語を学ぶ授業があっても、実際にその言語を話すという機会があまりないだろう。だから言語を習得するためにはこの授業のように、実践的に使うことがとても重要なことであると改めて気づかされた。また、私にとても積極的に話しかけてくれたことがとても印象に残っている。私自身もだが、日本人は間違うことを恐れてあまり自分から外国語で発言しようとしないという傾向があるとよく聞く。これこそが日本人が英語を習得できない理由であるように思えた。英語をはじめとする外国語を習得するためには、どんどん自分から発言し、間違いを恐れないで実践することが重要であるとイタリア人学生と交流する中で気づかされた。

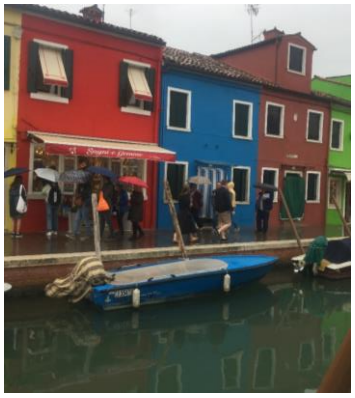
3）その他

この研修で何日間もヴェネツィアに滞在し、さらに、何人ものイタリア人の学生にヴェネツィアのおすすめの店や場所を教えてもらったので、一般の旅行でヴェネツィアを訪れるよりも濃い時間を過ごすことができた。一般の旅行では現地の人と話す機会はほとんどないと思うが、日本語の授業の中で仲良くなった学生と一緒にご飯を食べたり、ヴェネツィアを回ったりする中でイタリア人から見た日本の印象、日本に留学した時の楽しかった

話や困った話など普通では聞くことのできない、込み入った話などにいろいろな話を聞くことができて本当に貴重な体験をさせてもらったなと感じる。この研修でのたくさんの人と交流、イタリア文化との接触、さまざまなイタリアの建物を見物のどれもが刺激的だった。この研修で体験したことや経験したこと、感じたことなどこの研修に参加することでしか味わえなかっただろう全てを忘れず大切にしていきたいと思う。そう思えるほど濃い9日間だった。

4）研修先の写真





2019 年　カ・フォスカリ大学短期研修報告書

196030　K.H.

1） 活動概要

9 月 17 日に高知龍馬空港から羽田に移動し、羽田からミュンヘンに飛び、イタリアのヴェネツィアに到着した。翌日の 9 月 18 日からヴェネツィア・カ・フォスカリ大学の日本語学科の学生と交流をした。私たち県立大学の学生による高知についてのプレゼンテーションの発表や、日本語でのフリートーク、よさこいを一緒に踊るなど様々なことをした。その夜はカ・フォスカリ大学の学生が開くピザ会に行った。9 月 19 日から 20 日は 18 日と同じように大学へ行き、学生と交流をした。21 日から 23 日は自由行動で、現地の学生が案内をしてくれた。まず、21 日は鉄道でヴェローナに訪問し、現在はコンサートやオペラ公演の会場にもなっているアレーナ・ディ・ヴェローナという円形闘技場や、「ジュリエットの家」などの歴史的建造物や遺跡を巡った。22 日には船でムラーノ島とブラーノ島に行き、ベネツィアンガラス工房やレース工芸などを見学した。他にもミサを行っている教会やローマ広場、サンマルコ大聖堂、ため息橋を訪れることができた。ヴェネツィアの街も散策し、ジェラートやティラミスを食べたり、ヴェネツィアで一番美味しいケーキ屋に行ったり、お土産を買うことができた。

2） 研修での学び・気づき

私は今回の研修で多くのことを学び、体験することができた。その中で、気づいたことも多くある。

まず、私が気づいたことはイタリアの学生は多くの人が日本に訪れたり、日本のポップカルチャーに興味があるということだ。カ・フォスカリ大学の学生と授業でフリートークをしているとき、よく聞かれたのは日本のアニメや漫画のことだ。イタリアではかなり多くの日本のアニメが放送されているらしく、今日本でも放送されているものからとても古いものまであった。私自身はアニメや漫画がとても好きなのでその話ができてとても嬉しかった。現地で日本語を教えている先生に話をお聞きしたところ、やはり日本のアニメや漫画などというポップカルチャーに興味があり、日本語を学びたいという生徒が多いのだという。改めて日本のアニメや漫画は凄さを感じることができた。

また、日本に訪れたことのある学生が多いとも話したが、やはり東京が多かった。留学で日本に訪れている人や、旅行で訪れている人など様々である。東京の他には名古屋や京都、そして高知に来た人もいた。日本を訪れたことがある人も、訪れたことがない人も、日本と聞いて行ってみたいところは東京だという。私はこれを聞いて、もっと東京以外の県や町の PR をしていくべきだと思った。地方にも素敵な場所はたくさんあるため、それをイタリアの人や海外の人にも知ってもらい、ぜひ訪れてみてほしい。

イタリアは料理やお菓子がとても美味しいのが魅力の一つである。二つ目に私が気づいたことは、イタリアの食べ物の特徴や、イタリア人の食に関する思いだ。

ヴェネツィアに到着して、ホテルに向かっている途中、私がまず驚いたのは、食べ物屋の多さである。レストラン、お菓子の店、ジェラートの店、パン屋、など何軒もの店が並んでいる中で、このような店が隣り合わせで並んでいるのだ。スーパーなども合わせると、明らかに物を売る店よりも多い。レストランは様々な言語で客呼びをしていた。レストランはイタリア料理の店がほとんどだった。日本だと和食からフレンチ、イタリアン、韓国料理、中華など様々な種類の店が並ぶが、ファーストフードの店でさえヴェネツィアはイタリア料理だったのである。カ・フォスカリ大学の学生とのフリートークの時、イタリアの料理で美味しいものは何かを質問した。すると、日本でも有名なピザやパスタ、リゾットの他にも様々な料理名が出てきた。ヴェネツィア以外の場所から来ている学生は自分たちの街の美味しい料理を教えてくれた。現地の先生の話では、イタリアの人は自分たちの地域の料理をとても誇りに思っているのだという。私はこれらのことから、イタリアの人たちの自国の料理に対する愛着や誇りを感じることができた。

ヴェネツィアに着いた翌日、カ・フォスカリ大学の学生がピザ会を開いてくれた時、一人一枚ピザを注文した。バリエーション豊富なピザのメニューにも驚いたが、何より一番驚いたのはその大きさである。日本なら何人もで食べるような大きさのピザが一人分なのである。それを現地の学生はすぐに完食してしまうのだからさらに驚きだった。学生たちが言うには、これはまだ少ないほうだという。他の店でも、料理を食べたが、パスタやサラダ、様々な料理が大きかった。ヴェネツィアにいた一週間で胃袋がかなり大きくなったような気がした。

一週間ヴェネツィアに滞在している中で、イタリア料理について気づいたことがある。店に入って注文をすると、大体の食べ物はトマトとチーズの味がするのだ。特にピザは、上にのっている具材は様々なものがあるが、その下にはやはりトマトソースとチーズが入っている。ファーストフードとして売られているものも、ピザ生地でチーズやハム、トマトソース、ルッコラなどの野菜を巻いたり、挟んだりしているものが多かった。他にもサンドウィッチを焼いたものなどが売られており、それにもやはりチーズが入っていた。また、お菓子などの甘いものではよくピスタチオが使われていた。ピスタチオのクリームがケーキやパンに入っていたり、クリーム自体が売られていたりと、どこでも見ることができた。見た目は抹茶クリームに似ていたため、初めて見たときは間違えた。そして、野菜についても日本との違いに気づいたことがある。朝食をスーパーで買うことが多く、ピザやパスタばかり食べていると体に悪いと思いサラダを買った。買って食べたときに思ったことは、イタリアの野菜は日本の野菜より苦味が強いということだ。苦味を消すためなのか、サラダに付いていたドレッシングは甘酸っぱい味になっていた。

ヴェネツィアで食べた料理やお菓子はどれもとてもおいしかった。自分たちの国の料理について楽しそうに話す人々や、街のいたるところにあるイタリア料理のお店を見ていると、本当に自分たちの国の食文化を大切にしているのだと感じた。日本では和食を食べない人が増えてきている。様々な国の食べ物が入ってきて、それらを食べたり、作ったりで

きるのはとても素晴らしいことだが、自分たちの国の食文化も海外に負けない素晴らしいものだということを忘れてはいけないのではないかと思った。

最後にヴェネツィアの街並みについて気づいたことや、感じたことを話したいと思う。事前学習でヴェネツィアについて調べたとき、「水の都」や「海の都」という風に紹介されていた。ヴェネツィアに到着したとき、写真で見たとおりの、水路やレンガでできた家や橋がそこにあり、本当にヴェネツィアにやってきたのだと、実感ができた。道もアスファルトではなく、石のタイルが敷き詰められており、それがさらに古風な感じを強調し、街全体に歴史が残っていた。ここに住む人の主な交通手段は徒歩で、車などは通らない。代わりにあるのが水路をとおる船やゴンドラ、水上バスである。パトカーや消防車、救急車なども船なのだから驚きである。たくさんの小さな橋の下をゴンドラや船が通るとき、乗っている人と目が合って、お互いに微笑みあったり、手を振ったりした。車に乗っていればまずそんなことはないので、とても不思議でゆったりとした感じだった。ゴンドラには一度だけでも乗ってみたかったが、現地の人の話ではとても高いらしく、乗ることは断念した。徒歩と船が主なこの街では病気の人は住めないのだという。日本にいた時より明らかに多く歩いていたことと、道に慣れていないことで最初はとても足が痛くなった。ヴェネツィアに住んでいる人はとても健康的だと思った。

私は事前学習で「海の都の物語ヴェネツィア共和国の一千年」の上巻を読んだ。その中に、ヴェネツィアの街はまるで迷路のようになっていると書かれていた。実際に行って、それが本当だと分かった。自分たちだけで街を散策する際、グーグルマップを使って目的地を探すのだが、マップの通りに進んでも明らかに違うような場所に着いたり、近づいてみなければ分からないようなところに道があったりと、慣れるのにかなり苦労をした。また、本にはヴェネツィアには水を確保するために作られた特別な井戸があるということも書かれていた。この井戸は雨水をろ過して飲料水に変えるために開発された井戸である。井戸の四隅には雨水を集めるための穴がある。昔のことなので、今はもう残っていないのではないかと思っていたが、道の真ん中や開けた場所の中心に、本に書いてある通りの姿で存在していたのである。水の上に国を建てたり、飲める水を確保するための井戸を作るなど昔の人々の技術力の高さと熱意の凄さを感じることができた。

ヴェネツィアでは不思議な建物が多かった。塔のような建物があったのだが、それをよくよく見てみると真っ直ぐではなく、かなり傾いて立っていたのである。ヴェネツィアから少し離れてブラーノ島には、赤や青、緑に紫とカラフルな家が同じ色が隣に並ぶことなく建っている。ブラーノ島にカラフルな家が並ぶ理由は、漁師たちの事象が関係していると言われている。漁業が盛んだったブラーノ島では、漁師たちが朝早くから海に出て仕事をしていた。しかし、冬になると、自分の家がどれか分からなくなってしまうほど霧が深くなる。そこで漁師たちはそれぞれ自分の家にカラフルなペンキを塗り、目印にすることで深い霧の中でも帰ることができるようにしたのだという。これは、カ・フォスカリ大学の学生と話しているときに教えてもらったことで、理由というより、伝説として語られて

いるのだという。また、スーパーマーケットもまるで博物館のような建物の中にたてられていた。ヴェネツィアは食や建物などの多くの歴史が生きている街だと感じた。

3） その他

私は今回の研修で、異文化に直に触れることができた。一週間という短い期間の中で、遊んだり、一緒に勉強をすることで初めての海外の友だちができたことを本当にうれしく思う。また、相手のことをもっと知るために、イタリア語を学びたいという気持ちも出てきた。そして、現地の人と話すことで、自分たちとは違う価値観を知り、自分の視野を広げることができたのは、とても貴重な体験である。

研修の中で私が一番興味をもっていたのは、イタリアの食についてである。大きさに驚きながらも、そんなことさえ忘れさせるほどの美味しさイタリアの料理にはあったのである。お菓子に関してもとても素晴らしかった。バターの効いた伝統のクッキーや、コーヒーの味がしみ込んでいるティラミス、素材の味が活かされているジェラートなど多くのお菓子があった。食について留学するときはぜひイタリアに行きたい。

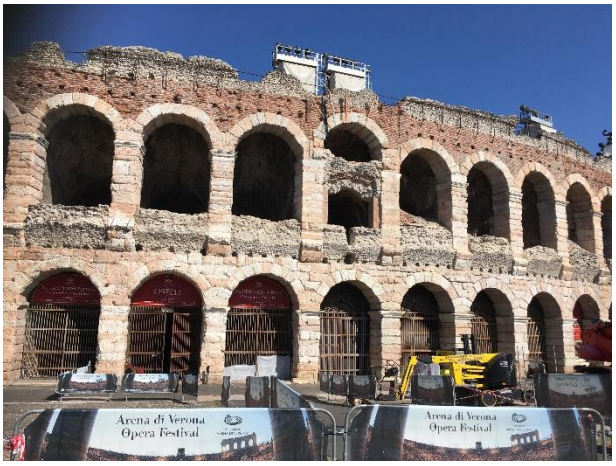
研修を通して、またヴェネツィアに行き、現地で親しくなった人たちと会いたいと感じた。そして、今度はヴェネツィアだけでなくイタリアのほかの地域にも足を運び、食の探求をしたいと思う。

大学から見える消防署

カ・フォスカリ大学本部内部

ヴェネツィアの水路

ブラーノ島街並み



アレーナ・ディ・ヴェローナ

2019年度　ヴェネチア　カ・フォスカリ大学短期研修報告書

194039　M.S.

1）　活動概要

① ヴェネチア　カ・フォスカリ大学日本語学科の学生との交流。

② またイタリアについての事前学習を踏まえ、実際にヴェネチア市内・近郊の文化的施設や伝統技術の工房を見学し異文化への理解を深める。

2）　研修での学び・気づき

ヴェネチア　カ・フォスカリ大学の学生と交流して、言葉の壁を乗り越えることはそれほど難しいことではないとわかった。日本人はなかなか英語を話せる人が少ない。きっと完璧を目指す人が多いからだと考える。彼らは違った。わからなくても、とにかく会話しようという意思がとても強く感じられた。私も、学生のみなさんのフレンドリーな姿勢に緊張がほぐれ、たくさん話すことができた。イタリアのこともたくさん教えてもらった。そして、観光の名所を案内もしてもらった。私たちだけだと行くことができなかったであろう、秘密の名所にもたくさん連れてってもらった。特に、彼らに連れてってもらった、小さな本屋さんは印象的だった。とっても狭い裏路地にあり、案内してもらわないと、気づくことができない。その本屋さんはただ本を売るだけではない。売っている本はとても古く、ゴンドラという船の上に積まれておいてある。その中から自分の買いたい本を探すのは至難の業だが、自分が思ってもみなかった本と出合えるので面白い。さらにその本屋さんには、本の階段がある。まるで絵本の世界に迷い込んだかのような本屋さんだった。彼らはほかにも、写真が撮りやすい場所など、いろんなところに連れていってくれた。会話も弾み、仲良くなることができた。言葉の壁を超えることができたのだ。ときには身振り、手ぶり、写真を使って会話した。

私自身も、帰りの飛行機でスペインの方と隣になった。私は、話してみたい！と思った。イヤホンの場所がわからなくて、困っているようだったので思い切って話しかけた。それをきっかけにたくさんのことを話すことができた。お箸の持ち方にはじまり、スペインのこと、イタリアのこと、日本のこと、たくさん話すことができた。私の片言の英語を必死になって聞いてくれました。殻を破って話しかけたおかげで、たくさんのことを学びました。片言でもいい、伝えたいという気持ちが大切なんだとその時、気づきました。

イタリアに行って、たくさんの歴史を学んだり、実際にたくさんのことを体験したりして、一つ大切なことを学んだ。「どうにかなる」ということだ。イタリアの歴史を見ていてもよくわかった。逃げてきたところで国を作ったりしながら、今に至っているのだ。イタリアでの体験もそうだ。言葉が違っても、どうにか自分の意思を伝えることができた。どうにかなったのだ。

3）　その他

イタリアではたくさんの伝統にも触れた。ガラスにレース、みんな限られた人にしかできない職人技だ。たくさんの食文化にも触れた。イタリアで食べた本場のピザやパスタ、ジェラートは日本で食べるものとは一味も二味も違った。

今回、イタリアに行けて自分にとって本当に良い体験だったと思う。一回りも二回りも成長することができたと思う。この体験をこれからに生かしていきたい。殻に閉じこもるのではなく、自分から殻を破ることができる人になりたい。

4）　研修中の写真

日本語のクラスにて

ヴェネチアの街の風景